



「本気で遊ぶ」ための実験生活のススメ

人間科学部 青山 鉄兵



2012年4月に文教大学に着任。専門は社会教育学・青少年教育論。主に青少年の体験活動の支援のあり方について研究しているが、研究よりも実践の方が楽しくなってしまうのが悩みの種。学生時代からYMCAなどの青少年教育実践に関わり、現在も東京YMCAの長期サマーキャンプ「野尻学荘」プログラムディレクター等を務めている。文部科学省生涯学習政策局生涯学習調査官、(独)国立青少年教育振興機構客員研究員などを兼任。特技は手話。(あおやま てっぺい)

文教大学の「真面目」な学生たちには、9割の「誇らしさ」とともに、1割の「物足りなさ」を感じている。いかにも教員採用試験に受かりそうな「教育的」な学生を見ると、学校外教育を専門とする者としては、その「真面目さ」を裏切りたくなってしまう。昨年度から始まった集中講義科目「子ども・遊び・自然」はこうした問題意識から始まったキャンプ形式の「非教育的」プログラムである。

1. 夏と冬、2つのシンプルな生活

「子ども・遊び・自然」は、夏季プログラム（9月上旬・4泊5日）と冬季プログラム（2月下旬・3泊4日）からなり、受講生はどちらか一方に参加する。

夏季プログラムは長野県の野尻湖畔のキャンプ場で実施している。学生の泊まる森の中のキャビンには電気がなく、グループごとにランプで生活する。全体での登山や野外炊飯、キャンプファイアなどを行う他、個人やグループではヨットやカヌー、カヤック、アーチェリーなどもできる。

冬季プログラムは長野県飯綱山麓で古くから「遊び」と「自然」にこだわるロッジで実施している。昨年度は全体での雪山登山や雪上ゲーム大会のほか、学生は一面の銀世界で雪玉を投げ合い、雪だるまや滑り台を作り、最終的には20人ほど入れる巨大なかまくらを作った。

どちらの宿舎も、決して便利でも豪華でもないが、豊かな自然と美しい景色、シンプルな生活と美味しいごはんが用意されている。



夏季プログラム

2. 「体験を通じた学び」の手前にあるもの

この授業の目的は、野外活動のスキルや指導法の習得ではなく、一人ひとりが「本気で遊ぶ」ことにある。最終的には子どもにとっての「遊び」の意味や、その支援のあり方を考えるための授業であることは事実だが、担当者の想いはそのずっと手前にある。

青少年の学校外教育に関する授業では、「遊び」や「体験」が話題になることが多い。授業後の学生のコメントには「遊びの教育的な意義」「遊びを活用した指導の重要性」といった言葉が並ぶ。この授業は、そうした「教育的」な視点からの「遊び」の捉え方に対し、「教育的に活用される「遊び」は「遊び」と呼びうるのか」「そもそも私たちは本当の意味で遊んでいるのか」を問うことから始まる。「遊び」を「教育的なもの」として称揚するのでも、「不真面目なもの」として否定するのでもなく、まずは自分の問題として「遊び」を捉え、「本気で遊んでみる」ことが必要なのではないか。この授業の根底には、そんな問題意識がある。



冬季プログラム

3. 「実験」のための2つの「触媒」

日常を離れた共同生活の中で、一人ひとりが本気で遊ぼうとすると、どんな化学反応が起こるのか。この授業ではその結果を自分の身体で体験するプロセスを大切にしている。そして、学生にとってはキャンプ生活自体が1つの「実験」として位置づくものと考え、「実験」のためのしかけとして、化学反応を促す2つの「触媒」を用意している。

1つは、携帯電話やカメラ、時計などの全ての電子機器を回収することである。美しい

景色があったらファインダーではなく自分の目で見ることに、音楽が聞きたかったら再生ボタンを押すよりも自分で歌うこと。学生にとっては、スマホがないだけでも十分「実験」的であるようだが、こちらとしては生活をシンプルにすることで、「遊び」の輪郭が少しでも浮き出ることを期待している。

もう1つは、「教育的」なプログラムにしないことである。講義や「意図開き」はなく、技術指導もない。「ふりかえり」的な時間も直接的には用意していない。「学び」の文脈に回収される以前の「遊び」や「自然」をそのまま体験することにこだわり、「教員・学生スタッフが率先して楽しむこと」「体験を過剰に意味づけしないこと」を心がけている。初日は表情の硬かった学生が、やがて躊躇なく私に水鉄砲を向けるようになるのは、この授業では「望ましい変化」として捉えられる（そして私も水鉄砲を向ける）。

もちろん、どれだけ「授業っぽさ」をなくしたところで、このプログラムが「教育的」に用意されたカリキュラムの一部であることは免れないし、私に教育的な「めあて」がないわけでもない。しかし、学生にはそんな「めあて」など気にせずに遊んでほしいし、実際そうできている学生がいることこそ、逆説的ではあるが、少しは「めあて」が達成できていることを示しているようにも思われる。

安全管理、経費、成績評価など、当然ながら「真面目」に考えなくてはならないことも多い。しかし、この授業自体が、大学教員としての「真面目」と「不真面目」をどこまで両立できるかという1つの「実験」なのだと考えている。



夏の水上プログラム